



非認知能力の育ちは、笑顔いっぱいになるための『そだちのねっこ』 ～子どもの欲求が満たされ、笑顔で過ごせるために、保育者ができることは～

1月30日(木)、0～5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

0歳児のクラスでは、自分の遊びたい玩具が手に取れる環境がありました。保育者の膝に座って絵本を見たり、安心できる保育者の存在を感じながら車を走らせたりしていました。保育室に入ると、人に興味を示したのか、近づいてきてタッチを求めてきました。安心できる空間にいるからこそ、『ちょっと気になる人・もの』に自ら近づき、『どんな人？どんなもの？』を確かめてみようとしているのだと思いました。まさに、安心の基地から一歩外の世界へ出てみようとする気持ちの育ちを感じました。



1歳児のクラスでは、違う遊びをしながらも、大好きな音楽が鳴ると、体を動かしたり、手でリズムをとったりして楽しんでいました。「みててや!」と自分のしていることを見てもらい、「できたね!」「楽しいね」と認められたり、共感されたりすると安心して、再び遊び始める姿がありました。見たり聞いたり触ったり匂ったり、五感を使って色々な遊びや経験を通して、体得していると思いました。また、感じたことを『伝えたい』気持ちも大きくなり、それに応答する保育者の存在があることで、語彙数も増えていると感じました。

2歳児のクラスでは、保育室のコーナーを活用して、おうちごっこを楽しんでいました。「これも洗っとこ!」「また汚れたね～」と、会話をしながら保育者の手作り洗濯機にタオルを入れたり、干したりしていました。生活と遊びとのつながりをもつことで、想像力が豊かになったり会話が増えたりもします。また、人形の髪の毛をとかしたり、聴診器を当てて「大丈夫よ～」と声をかけたりして遊んでいました。自分がしてもらって嬉しかったことが再現でき、一人ひとりのやりたい遊びが保障されていました。時々、近くにいる友だちと「おんなじ～」と笑い合う子どもの姿も印象的でした。



3歳児のクラスでは、好きな音楽が鳴ると、なりきりアイテムを付けて、踊ったりヒーローになりきったりしてステージごっこを楽しんでいました。保育室の中央には、いつでも誰でも運転でき、たくさん乗れる大型バス(車)がありました。車にはハンドルを掛ける場所があり、ものを大事にする、片づけやすい環境も工夫されていました。「次はどこに行く?」と保育者に聞かれると、「鬼退治!」と力強く答え、車から降りて鬼退治へ向かっていきました。自分のしたい遊びをしながら、友だちのしている遊びにも関心をもつようになってきていると思いました。遊びと遊びがつながり、友だち同士のかかわりも増えていききっかけになっていることがわかりました。



4歳児のクラスでは、色々な素材を使って、遊びに必要なものを作って遊べる環境がありました。1人で集中していたり、友だちと一緒に「こっちとつなげる?」「この色の方がよくない?」など会話したりして遊んでいました。保育者が「何、作ってるの?」と聞くと、「宝石作ってるねん」、「僕はな、虫作ってるねんで!」とすぐに答えていました。「すごいね!こんなに細かくできたんだね。本物みたいだ!」と声をかけられると、さらに自信満々の表情を見せ、再び作ることに集中していました。周りの人に認められることで、自信になり、『得意』が増えていくことがわかりました。好きな遊びを充分できる時間や環境があることで、

子どもの意欲と発想力、クオリティーが高まると同時に、手先の器用さ、技術力も必然的に身に付くと思いました。

5歳児のクラスでは、「あれ?」「なんで?」など、気になったことを何でも調べてみようということで、それを『研究』と名付けて遊んでいました。自ら調べたり、比べたり、試したりできるような素材や図鑑などもあり、子どもたちが真剣に取り組んでいる姿は『研究者』そのものであると思いました。そして、そのことを友だちや保育者に伝える『研究発表』も大変興味深かったです。「やりたいことをとことんできる環境」と、「やったことを認めてもらえる友だちや保育者の存在」があることで、ここまで集中し楽しめるんだと思いました。



また、駄菓子屋さんでは、突然のお客さんに対して、「こちらはくじ引きになっています。白が当たりで、ラムネが2つもらえます」と丁寧に説明をし、生き生きとした姿でやりとりを楽しむ子どもたちがいました。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】の『社会生活との関わり』『言葉による伝え合い』『数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚』『豊かな感性と表現』などにつながる育ちがたくさん見られました。

それぞれの学年の育ちが引継がれ、積み重なっていることがわかりました。幼児教育では、子どもたちの“やりたい”意欲を大切にすると同時に、子どもたちの思いを実現できるように“ねらい”をもって環境を構成し、保育者の援助が重要になります。『こんな子どもに育ってほしい』という思いをもちながら、「やらせなければ…」ではなく、「どうしたら楽しめるかな?」「どうしたらやる気になるかな?」を常に考え、子どもの姿に応じた保育内容を実践し、育ちにつなげていくことが幼児教育の基本となります。その中で育まれる非認知能力（自己肯定感、意欲、持続力、協調性、創造力、失敗しても諦めない力など）が、認知能力の土台となることも研究報告されています。



安心できる環境のもと、自分に自信をもてることで、周りの“ひと・もの・こと”を大事にできる気持ちも育っていきます。子どもたちの『笑顔』は、意欲や学びの芽生えにつながる一歩だと思います。

小学校以降で進められている教育において、『環境を通して行う教育・保育』＝『遊びは学び・学びは遊び・やってみたいが学びの芽』である、幼児教育の基本的な考え方を取り入れた教育実践につながることを期待しています。

これからも、乳幼児期の遊びのエピソードを、『そだちのねっこ』を通して発信していきます。